巻頭言

新たな百年の歴史を刻む

今井 尚生

歴史をもちつつ歴史の中に生きている、それが人間である。言うまでもないが、この場合の歴史とは、単なる物事の時間的な前後関係を意味するものではない。歴史的なあり方とは、過去を踏まえ、将来へと歩みを進めるものとして現在的生を意識し、形成することを意味する。「どこから来て、どこへ行くのか」という問いと共に己を省みるとき、人は自らが歴史的であることを意識する。そして、一人の人間ばかりでなく、人の作る共同体もまた歴史的な存在である。

2019 年 3 月、西南学院の創立百周年を記念する諸事業の集大成として『西南学院百年史』（以下『百年史』）が刊行された。西南学院に関わるものが、歴史的存在としての自覚をもち、学院の精神を継承しようとする営みの結晶である。この『百年史』の完成は、人々に次の百年を意識させる契機となった。建学の精神を涵養し、歴史への理解とその継承を図ることを設立の目的とする西南学院史資料センターは、次なる百年の歴史が紡がれて行く軌跡を記録する作業の一環として、この『西南学院アーカイヴズ』の刊行を企画した。

名称に「紀要」ではなく、「アーカイヴズ」なる語を用いたのは、学問的歴史研究だけでなく、口述に基づく記録を資料として含めることを是としたためである。「紀要」とは、研究機関が刊行する研究論文集のことである。将来の歴史記述のための資料を残すには、客観的な根拠と学問的な手法に基づいた研究が必要不可欠であることは言うまでもない。その大切さを示すエピソードとして、『百年史』編纂の作業メンバーが、西南学院の校歌誕生の年に関する検証過程で明らかにしたことを紹介したい（詳細は『西南学院史資料センター紀要』p.28）。『西南学院七十年史』には、校歌を作詞した水町義夫の追想を基に、1921 年 3 月 10 日の第 1 回中学部卒業式で校歌が披露された

と記述されている。ところが、1922年の第2回の中学部卒業式および高等学部入学式の式次第には「校歌斉唱」の記載が見られるものの、前年1921年の卒業式次第や新聞記事には校歌斉唱を裏付ける記載がない。また、校歌の作曲を上野音楽学校教授島崎赤太郎に依頼したのは、同校の学生であった不破ひさ子である。もし不破が島崎教授と面識を得たのが、彼女が上野音楽学校に入学した1921年4月以降であるとするならば、先の式次第のことも考え合わせると、西南の校歌誕生は1921年3月より後であった可能性が高い、と結論付けられるという。

このように、将来の歴史記述のための資料を残すには、一方で客観的な根拠と学問的な手法に基づいた研究が必要であるが、他方で学問的な手法による研究論文に限ると、執筆者は限定され、また執筆にも時間を要し、その間に大切な証言が失われかねない。人の記憶に基づく証言であって、客観性が証明されないことでも、価値あるものは存在する。また当該記述に関する一次資料は将来の発掘を待たねばならないものや、そもそも客観的な一次資料はなく、口述によるものしか存在しないこともあるだろう。

重要なのは、客観的根拠に基づくものとそうでないものとの違いを明確にした記述を心掛けることである。『西南学院アーカイヴズ』は、学問的論文のみならず、広く記録にとどめるべきものも資料として含めることとした。そして、そのことを意識するためにも、名称には「紀要」ではなく、「アーカイヴズ」を用いた。客観的根拠の薄い記述の学問的検証は今後の歴史研究に委ねられることになるが、後世の人々が、その検証の作業を通して、歴史の中に生きた学院関係者の息吹と、建学の精神がさらに継承されていくことを願って、『西南学院アーカイヴズ』を発刊する次第である。